

第16回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』
——スポーツで社会を変えるために今、必要なこと——

【第1回】

テーマ:「今、日本のスポーツが変わるために必要なこと」

講師: 島沢優子氏 (ジャーナリスト)

講師: 松橋崇史氏 (拓殖大学准教授)

司会: 平尾剛氏 (神戸親和女子大学教授 ラグビー元日本代表)

日時: 2022年10月29日 (土) 19:00~20:30

会場: 神戸国際会館セミナーハウス

スポーツ界の幅広いジャンルから知見豊かな方々をお招きし、各種スポーツ界の現状や人材育成のポイントを学ぶ『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』。第16回となる今年のテーマは「スポーツで社会を変えるために今、必要なこと」。

ご存じのように、2022年度の日本のスポーツ界は東京五輪の負のレガシーが露になり、政財界を揺るがす大きな事件へと発展しそうな気配です。その一方で、身近なスポーツ指導の現場に目をやると、部活やジュニアスポーツの現場では、いまだに指導者の暴力・暴言などのパワハラ行為の報告が途切れることはありません。時計の針が「昭和」で止まってしまっているかのように、体罰は行わないけれども、その分怒鳴る、大声を出して恫喝することで子供たちをコントロールしようという指導者は、いまだ後を絶たないようです。もっと子供たちに、自由にのびのびと、一つ一つのプレーや戦術を考えさせながら、スポーツを通して「自主性や主体性」を育てるという指導はできないのでしょうか? ということで、今期初回となる今回は「今、日本のスポーツが変わるために必要なこと」をテーマに開催いたします。



講師は、部活やジュニアスポーツの指導現場を長く取材され、最近では『スポーツ毒親 暴力・性虐待になぜわが子を差し出すのか』という衝撃的なタイトルの著書を出されたジャーナリスト・島沢優子氏。そしてもう一方は、大学野球の1、2年生たちの試合機会を生み出すために、学生たちが主体的に運営するリーグ戦を地方のスタジアムで開催し、大会期間中には地元の子供たちや高校生チームの野球の指導も学生たちが行うという、自主性や主体性を育てるだけでなく、地域貢献をも

学ばせようというリーグ戦を創設された、拓殖大学准教授の松橋崇史氏。司会進行は昨年につき、神戸親和女子大学教授であり、元ラグビー日本代表の平尾剛氏に担っていただきました。



また今期のインテリジェンス講座は、コロナ過という状況を鑑み、会場で聴講いただくリアル参加とオンライン参加を併用したハイブリッド形式にて開催することといたしました。募集告知を出すや否や、このアナウンスに、インテリジェンス講座参加常連の方々からは「待ちました！」のお声も頂戴し、想像以上の反響に

事務局も驚いております。

初めてのハイブリッド形式ということで、音響含め特殊な機材設営が必要なため、通常より早い時間から会場設営に取り掛かり、準備を進めましたが、音響トラブルがあり、司会の平尾氏、そして講師陣との打ち合わせ時間が押してしまい、リアル参加者らの入場も開始時間ギリギリとなりましたが、平尾氏の挨拶により会がスタート。ご



自身の経歴、本日のテーマ、そして講師お二人が紹介され、お三方のお顔がスクリーンに並びます。

ジュニア世代の指導者に多く見られる言葉の暴力などのパワハラ行為をなくし、もっとのびのびとスポーツを楽しみながら、自主性や主体性を育むスポーツ指導の現場にしていくためには、「今、何が必要なのか」みなさんに熱く語っていただきます。



まず、はじめに、島沢氏の著書『スポーツ毒親 暴力・性虐待になぜわが子を差し出すのか』の感想として「（本を通して実態を知って）びっくりした。と同時にやっぱりかと思った」と平尾氏。それを受け「暴力根絶宣言のきっかけとなった桜ノ宮高校の事件。その10年後に、これを書いた。その5年前には『部活が危ない』を書いた。桜ノ宮の件を含め、暴力でなく暴言による部員の自死が3件あった。これらは指導者だけでなく、指導者、学校、保護者の三位一体が原因だと思っている」と島沢氏。また別の観点から「ユース年代の全国大会をやっている国は他にあまりない」ともコメント。ユース年代の全国大会実施が勝利至上主義、指導者の評価、自己承認欲求に繋がるほか、保護者も我が子に多大な期待をし、その抑圧が子供におりてくるという悪循環、悪影響を及ぼしている大きな要因だと、パワーポイントの資料と共に提示します。

ブラック部活を蔓延らせる大人の「三位一体」



「日本ではブラック部活問題が継続的にあるものの、効果的な対策があまり行われていないのが実情。日本スポーツ協会はライセンスを持っている人向けに講座を開催しているので改善意識、向上心のある指導者はそういうものなどを通して学んでいるが、そうでない人もいます」と島沢氏。ここで、スペイン発の国が製作した保護者への啓蒙動画を紹介。サッカー大国スペイン

ンでは、一流サッカープレイヤーになれば巨額マネーを手にする将来が確約されるという現状もあり、サッカーをする子どもではなく保護者が熱くなりすぎ、子どもにプレッシャーを与えるという象徴的なシーンが散りばめられています。サッカーの試合を観に来ては大声でプレーの指示をしたり、説教じみた行動をとる父親に対して「No vamos (来ないで)」という子供たちの叫びが実に印象的な動画でした。ヨーロッパでは、こういう親は全体のおよそ2割程度で、7～8割はそうではないのに対し、日本の場合は割合が逆転していて、親も子供を抑圧していると島沢氏は言います。さらに、「他国の方がこういう風に修正する力が高い。ネガティブなことを受け止めて、効果的な策を打っていく必要がある」と続けます。

それに関連して、近年の日本スポーツ界で風潮が変わりつつある点として、島沢氏が大谷翔平選手の影響を例に挙げました。「4、5年前までは、引退したトップアスリートが『自分は理不尽な指導を受けたからメンタルが強くなった』という選手が結構いたが、それによって生存者バイアスがかかり、子供たちはバーンアウトする。大谷翔平選手たち近年の若手プレイヤーがその風潮を変えた。彼らの影響は大きい」。

ここで平尾氏が、大学時代に野球をしていて自身もアスリートであり指導も行う松橋氏に、自身の観点からどう思うか問います。私生活では子供が三人いる松橋氏。「親がどう考えるかでスポーツができる、できないが大きく左右する。子供が楽しさに気づくにも親の理解が及んでいないと、という側面がある。入ってきた子どもにケアをして楽しんでもらうことはできるが、その手前でどう訴求するのが重要」とスポーツにおいて、保護者が子どもに与える影響の大きさに



ついて語ります。一方で、「私は大学生もみている。そういう世界（ブラック部活）をサバイブしてきた子が拓殖大の部活にもたくさんいるので、そういう意味では悩ましい」と複雑な心境を吐露。続けて自身が大学院に進学した理由として、スポーツが大きく関係していることについて語ります。「慶応大学野球部では4年生がコーチをするカルチャーがあり、私も当時、選手をやりながらコーチをやっていた。四年間でいろんなことを学ばせていただいた。スポーツは社会と接点があるようでない。そこを繋いでいかなければいけないと思ったのが大学院

に進んだ理由。スポーツと地域をつなぐことをやりたいと思い研究をスタートした」。

さらに平尾氏からの質問を受け、大学野球の下級生が試合を経験するためのリーグを創設した経緯を、パワーポイントの画面を見せながら語る松橋氏。「新潟県の野球場を管理している方からオファーがあり、阪神の二軍チームを呼んできて、自分たちで協賛金を集め、大会をするということにちなんで研究をした。それを機に大学1、2年生を連れてきて、ここでリーグ戦を始めようになった。1、2年生が切磋琢磨する機会をつくるために始めた」。

開催趣旨：問題意識

発言中:事務局

1. 1, 2年生の育成世代の試合機会の創出
2. 地域活性化／地方創生に寄与する大学スポーツ
3. 部員が企画し運営するイベントのモデル構築（大学スポーツへのメッセージ）



サマーリーグ企画チームの活動内容

協賛班

参加校OBや地元企業、関係者からの協賛獲得にむけ、全参加校の担当者が対応する。

地域貢献班

世代ごとの野球教室プログラム、障がい者野球チームとの交流、オンライン野球教室プログラム、一般観戦者を対象にした交流プログラム

高校野球女子マネージャーのアナウンス体験

エクスカージョンの企画運営

広報班

SNS運用、HP運用、ポスター・チラシ・パンフレット作成、PV作成



選手カードの作成

地域貢献の一環で選手カードを作成、地域貢献プログラムで配布

打者カード

「壁は高いほど越える
どんな困難も越えていかなければならぬ」

WASEDA
NAOKI KONDO

Summer League
26/5

24 近藤 直樹 選手 右打
178cm/78kg 人間科学部2年 江戸川学園女子

サマーリーグへの思いや抱負など
近藤 直樹です！2017年に引退後2年間の参加となります。下町で育つ僕らは関東甲信越の豪傑との戦い合いを今年も楽しみにしています！今年も応援宜しくお願いいたします。

投手カード

「目の前を越すことは
全てバットで決まるとは」

meiji
KIO NAKAMURA

Summer League
26/5

36 中村 希生 投手 右打
177cm/72kg 商学部商学科3年 桜台三高校

サマーリーグへの思いや抱負など
最後の夏に向けて大事な時期になりますが、ピンチで三振が奪われるようにストレートの真を上げていきたいです。そして、チームの中心として勝利に貢献したいです。

裏面カード (共通)

Summer League
2018

QRコード

大学野球サマーリーグで活躍している選手情報をGetしよう！出場選手のエピソードや最新情報などが満載！！

<https://sml-sanjo.sakura.ne.jp>

大学野球サマーリーグのコンセプト
新潟県三条市で「ひとづくり」を！
大学野球の次世代主力選手たちが、神宮球場を飛び出して熱い戦いと地域の皆さまとの交流を行います！

2015年に第一回大会が開催され、現在参加チームは地元大学含め全国から10校以上が参加。交流プログラム、選手カードの作成、試合前のベンチの裏を見てもらうなど、学生目線で色々な企画を考えてもらい、ボリュームをどんどん膨らませているところだとか。また、この大会だけでなく、各世代対象のクリニックやオンライン野球教室のほか、障害者野球の選手との練習会や交流も行い、学生も参加者も楽しんでやっていると実に興味深い活動内容を共有くださいました。

松橋氏のクリニックに関するコメントで自身の体験を思い出した様子の平尾氏。神戸製鋼現役時代のエピソードを披露します。「地元のラグビースクールの子供を呼んで試合をするというイベントがあって、みんな喜んでくれたんです。後日、ある選手がアドバイザーに就いて、クリニックみたいなのをやろうって提案したことがあったんだけど断られた。指導者の方針に合わないらしくて。指導者が自分の指導環境に入ってきて欲しくないんだらうなって、当時の選手同士で話していた」。この平尾氏のコメントに対し、松橋氏が創設した大会参加チームでは、そういったスタンスのチームはないらしく、純粋に「ああいう選手になりたい!」「野球をずっとやっていると、こういう雰囲気をつらうんだ」という意識を持ち、感じてもらいたいがためにクリニックなどを実施していると松橋氏。ここで「野球は難しいですね」と野球界の構造について、サッカー界との比較をしながら説明する島沢氏。「サッカーだとFIFAとか世界的競技団体があるので、そこから考えが下りてくるんですけど、野球はそうじゃないので、コンセプトが下りて来にくい」。松橋氏も「グローバルスタンダードが明示されていない。日本はこう、アメリカはこう。どっちがいい悪いではなく」と同調します。「松橋先生がされているような草の根活動を通して、ボトムアップで変えていく必要がある」と島尾氏。

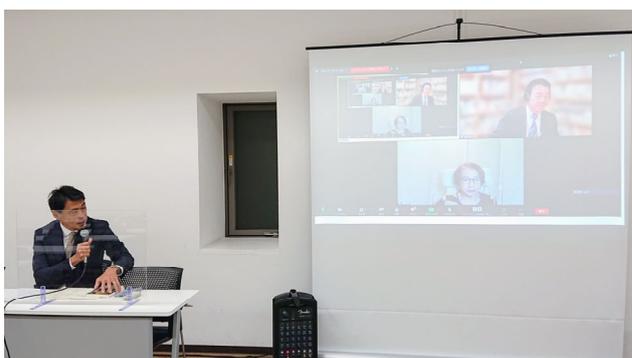


回も後半に差し掛かった頃、平尾氏が大きな問いを投げかけます。体罰や部員の自死などのニュースが報道されると指導者だけが悪とされる傾向がありますが、「『学校、指導者、親』の三位一体の部分を変えていく必要があるが、どこから手をつけていいかわからない?」と。この問いに、大きく分けてその原因

はヒューマンエラーとシステムエラーの2つに分かれると島沢氏が持論を展開します。システムエラーに該当する構造的問題の代表となるのが冒頭にもあったユース年代の全国大会。勝った指導者、選手だけが道が開かれるというもの。この存在をどうするのか?が今後の日本スポーツ界の大きなテーマ。ヒューマンエラーについては、指導者の再教育プログラムをしっかりと行う必要性を示唆。どちらか一方ではなく、その両輪を回していくことが大事という結論に至りました。

「指導が変わると、指導者の顔が変わる。親御さんも変わる。組織が大きくいい方向に転換していくはず。社会的に厳しい目を向けられている中で、自分もいい指導をしていないというのは指導者自身もどこかで気づいている。指導者を守るためにもそうしていかないといけない」と島

沢氏。かつては自身も毒親だったと著書にも記している島沢氏故とも言えるコメントも聞かれました。これにこう同調する平尾氏。「忙しい中で自分の指導を見直す時間もあまりない。厳しい指導や練習に耐えたから強くなれた、という考えも間違い。理不尽な指導は短期的にパフォーマンスをあげる場合にはある程度効果があるかもしれない。ただ、そうやってあげたパフォーマンスはいつかバーンアウトする。追い立てるようにした厳しさではなく、厳しさの質を変えていくことが必要。むやみやたらに理不尽に追い込む指導は間違い」。これに対し、奮い立たせるために暴言を吐くのは、厳しさではなく甘やかしであり、ずっと世話を焼いているのと同じだと島沢氏。この例として、かつて取材した下北沢成徳高校バレー部監督の小川先生の指導について島沢氏が紹介します。大山加奈、荒木絵里香などのバレーボール日本代表選手を多数輩出している小川監督。「主体性、自発性などを重視した指導に定評がある監督で、ずっと選手に問いかける。大山選手においては『先生苦しい。こうしろって命令して。自分で考えろ、は辛い』と小川監督の指導法について話していた。スポーツが人を育てるコンテンツとして認められるためには、それが必要」と島沢氏。



大人たちの姿によって、スポーツは楽しくないと子供が感じ、スポーツが選ばれにくくなっているという現状があります。実際のところ、クラブ活動でもダンスなどに押されていると言います。本来スポーツは楽しむもの。さらに平尾氏からは、SCIXの理念でもあるインテリジェンスの部分にも話が及びます。「個人的

には、アスリートはもっと社会性を身につけないといけないと思っている。全国大会の魔力があって、未だに朝練、昼練、夜練をしたりしてるところもあり、教養を豊かにする部分がなくなっている。知性を身につける余裕も必要だと思うが、現場では練習量が大事とされている」。これに島沢氏も激しく同意。「現状としては、小学生年代から指導者が考え直す必要がある。勝つために子供に無理をさせるなんて言語道断」として、とある少年サッカーの試合でのエピソードを紹介。次回の試合は家族の法事があるので参加できない、と言う子どもに対して、コーチが烈火のごとく怒り出したのだとか。さらに、子供たちが整骨院で電気治療を受けたりする、そんな国は他にないと島沢氏。これには会場でリアル参加している参加者も大きく頷くと同時に、失笑の聲が漏れました。

先述の大学野球の下級生が参加する企画チームについて、始めは自分自身後ろ向きだったという松橋氏。なぜなら、選手自身が「企画チームに参加することで、自分はレギュラー争いの競争レースから下りる」とはなかなか言えない。また、指導者も「(企画チームに)行ってこい!」と言えないチームがあるから。「選手としてだけでなく、運営する、サポートする役割の人間になることで社会と繋がっていけるわけで、地域や社会との接点を作る役目があるということを理解して欲しいし、そういう選手をリスペクトして欲しいと、企画チームを作るにあたっては各指

導者に話をしているんですが。それを逆に向こうから言ってくれる指導者も中にはいて、そういう指導者が増えれば、社会やスポーツ界も変わっていくんだろなとは思いますが」と松橋氏は期待を込めます。平尾氏も「運営や企画に回った人ほど社会性が身につく。スポーツは勝負だけではなく、それを通じて社会について学ぶことができる。そう思うと、やはり小学生時代、子供達のスポーツが大事。まだ成長途上で、自我が確立していない時期だからこそ大事。生まれ持ったものや、努力の賜物と植えてしまうのは罪。できる人を慢心させもするし、できない人に自信を失わせうる。大人たち側がしっかり学んでいく必要がある」とし、まさに今日のテーマの答えは「大人が学ぶこと」。指導や教育といった観点で、脳科学的にも証明されている有効なアプローチの仕方や発言の仕方などがあるので、きちんと大人が学び、何が大事かを知って実行することが大切だと思うと、島沢氏のコメントで締めくくられました。

そしてここからは質疑応答タイム。

- ・サッカーJリーグなどトップチームの指導に疑問があるが、どう思いますか？
- ・親はどうしたら学べる？システムはある？
- ・スポーツ推薦のあり方については？
- ・・・など様々な質問を頂戴し、講師のお二人はもとより、司会の平尾氏に真摯にお答えいただきました。参加者の皆様からのご感想、ご質問ありがとうございました。今期初回のインテリジェンス講座はこれにて閉幕。初の試みとなりましたハイブリッド形式で開催した今回のインテリジェンス講座でしたが、多数の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。

次回は11月23日(水・祝)19:00より、ラグビー7人制・15人制元日本代表の正面健司さん、ラグビージャーナリストの村上晃一さんお二人を、この会場にお招きし「ラグビー女子日本代表が見せた『世界8強入りへの可能性』。RWC2023 フランス大会の“ジェイミーJapan”は？」をテーマに開催させていただきます。次回も多数のご参加お待ちしております。

(レポート 中野里美)

スポーツ振興くじ助成事業

